

家庭教師ヒットマン REBORN！ 対立の変革 編

エセ悪魔

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したもので
す。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を
超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

波乱の継承式騒動も7／3騒動も終えて慌ただし生活によくやくまともな一息つい
たツナ達ボンゴレ十代目メンバー。しかし、事件は必ず起こってしまう。これも悲しき
そうゆう運命なのだ。

変革はいつだって人生において必要であり必然などとまだ気付いていないそれは
自分の地位然り自分の覚悟然り：

燃える炎に凍る氷、互いがぶつかり力を競り合う。さすれば恵みが地と空を満たす。
ぶつけよ男子、答えよ乙女。

目次

			標的	新 1
標的	新 2	事件は二つ起ころる part		
新 5	新 3	事件は二つ起ころる part		
事件は二つ所か三つ目発覚	新 4	事件は二つ起ころる part		
3	標的	事件は二つ起ころる part	19	標的
52	新 4	事件は二つ起ころる part	37	新 1

標的 新1 プロローグの先には絶望？

「俺の名はリボーン。」

今でも、纖細に大雑把にどこか大切に覚えている。

「俺はお前を一流のマフィアにするためにやつて来た。」

この一言が自分にとつて転機だつたのだろう。

はたしてそれが幸運への片道切符か地獄への六文銭なのかは自分でも白黒付けにくい物だ。

まるで羽の無い天使。

これが第一印象だつた。

そんなリボーンは俺を無理矢理死ぬ気にしては周りを巻き込んで楽しくも辛く大変

すぎる迷惑ばかりをしては友達をファミリーの幹部にしたりと……よくくじけなかつたな俺……

でも、

骸に乗つ取られそうな時だつて

白蘭との命を賭けた闘いの時だつて

復讐者たちとの戦いでも

助けてくれたのはあいつだつた。

勿論、京子ちゃんにハルにデイーノさんにイーピンに守護者の皆だつてこんな俺なんかのために修行をしてくれた、心配をしてくれた、泣いてくれた、戦つてくれた。

本当に、俺にとつてダメツナの人生にプラスな物ばかりが溢れてくる。
でもまだ足りないと感じてしまうのはなんでだろうか？

欲張りかな？

でも、変わる事だつて多分必要なんだと思うんだ。

なんと言ふかさ・・・人との仲つて粘土みたいで、形をたくさん変えれるけど本質は
変わらなくて・・・綺麗な形になつたりちょっと歪な形になつて綺麗にしようと頑張つ
たり・・・

俺がずっとこの関係を続けたいけどボンゴレを繼がなきやその関係が消えてしまう
かもしれない。

怖いな、何かを得て何かを落とすつて・・・

でももう考えるのは止めたよ。

ずっとボンゴレは継ぎたくないって言つてたけど、I世がグローブを覚醒する時に
「ボンゴレを継ぐのも壊すのも好きにしろ」って言つてくれた。

ボンゴレには恨みがあつて、それを超えるほどの沢山の物を貰つたんだ。
なら、その貰つた物への恩返しをしないと助けてくれた皆やリボーンに九代目にも失
礼だよね？

だから俺は十代目に継ぐよ。

でも、ボンゴレってマフィアの形をぶつ壊す。

I世が作りたかった物を俺は新しく作り直して皆が平和に命を落とさなくていいよう始めたいんだ・・・

だからさ、その始める切欠として俺は君に言いたいことがあるんだ。

ねえ、京子ちゃん。

復讐者の戦いの後、俺の告白を冗談だつて思つてたでしょ？

俺はマジだよ

だから、もう一度・・・三度目の正直で言うよ。

答えはYESかNOだけだからね。

京子ちゃん、

俺は君の笑顔がとても明るくて何をやつてもダメで皆から馬鹿にされてた俺にも優しくしてくれて、ダメツナだつた頃から今この瞬間まで

大好きです、

俺と付き合ってください。

「・・・・・ツ、ふあゝああツ」

目が覚めるといつも通りの自分の部屋。少し過去と夢の続きが名残惜しがそうとは言つてられないほどに時間は待つちゃくれない。

「おはようツナ兄。」

「うん、おはよう。」

部屋を出ると丁度フウ太が隣の部屋からやつて來た。

互いにおはようと言つた途端いつも通りな声が聞こえてきた。

「やつほほ～い!!着いてこれるなら着いてくるんだもんね～！ガハハハハハ!!」

「待つ！！イーピン!!!今日こそは許さない!!!!」

ランボとイーピンが足元をちょこまかと走るのでは無い、車みたいにズドーンと走つてくるのだ。

まあこれはいつも通りだから慣れてしまったのだが。

「ヨツと。」

「ホツ！」

フウ太と同じタイミングで足を曲げて飛び上がる。

ビューン!!

二人の飛んだ足元を小さい二人が残像を残してるので無いかと思うほど早さで走り去りUターンしたり部屋に入つたりと嵐のような物だ。

「はあ、相変わらず元気だよなあいつら・・・」

「フフツでも、ランボもイーピンもちよつと変わってきてるよね?」

「確かにそうかも。何というか、会つた時よりもなんだか色々と落ち着いてるよね。」

大体一年くらいだろうか?

ランボもイーピンもフウ太も生み親や親しい人物が他に居なかつたり遠かつたり関係が複雑だつたりと、後10年近くはこの沢田家でお世話になるだろうな、とりボーンがぼやいてたのが記憶に新しい。ビアンキもまだここに住んではいるのだが仕事の関係上しばらく海外に行かないといけないらしく今の沢田家は六人体制だ。

「あ、そういうえばランボのランキング、また新しいのが出来たんだよ。」

「へ、へえ～・・・また恨み買われてる系?・・・」

かつてランボはその天然?才能?の力で「うざいマファイア」「殺して座布団にしたいマファイア」部門ダントツ一位を獲得していた。

不名誉だが、今までの事考えてれば妥当であるなど納得出来てしまう。
でもフウ太は嬉しそうに首を横に振った。

「ううん、そうゆうのじゃなくてね。最近は『幼稚園で頼りになるランキング』の第1位

なんだ。」

「そうなんだ。なんだか安心したよ・・・ランボの奴やっぱ幼稚園に行けて良かつたな。」

いいランキングの1位であつたことに驚愕少々、嬉しさ大半で自分のことじやないのにとても嬉しかつた。ランボもイーピンもああ見えても5歳の小さな子供だ。

ランボは一応イタリアでほんの少しだけ幼稚園に通つてたそしが彼は最年少なマフィアだ。しかし、マフィアだからと言つても子供なんだからそうゆう所は行つとくべきだと父さんやりボーンに相談して良かつた。

「だね。ランボはイタリア語も喋れるからちよつと浮き気味ではあるけど仲良くやつてるそしだよ。イーピンも皆から体術が凄いって好評だよ。」

そう駄弁りながら階段を降りて茶の間に向かう。まだ二階辺りではバタバタと聞こえてくるがまあ後五分で收まるはずだ。

「おはよう母さん（ママン）」

「ツー君もフウ太くんもおはよう、朝ごはん出来るわよ!!」

「ありがとうございます。じゃあ、いただきます。」

「いただきます。」

テーブルにはいつも通りにソーセージやスクランブルエッグに焼かれたトースト二枚程が皿に乗っている。

それを食べながら茶の間にいつも居るはずのアーツの影が無いことに気付く。

「ねえ母さん、リボーンはどうしたの?」

「それが分からぬのよ・・・昨日くらいに『ママンのエスプレッソ欲しい』って言つて飲んだ後すぐアメリカに行くつて言つて出かけていったから。」

「ふ〜ん、珍しいねリボーンがそうやつて出かけるだなんて。」

「そうだね。いつもならツナ兄にだつて何も言わずにふらつと何処かに行けば何時の間にか戻つてくるから。」

「たまに言つてから出かけてたけど最近ずつとそうだつたよな。今度は何の用だつたんだろう？・・・」

リボーンは自由気ままに何処か行くのはデフォルトでもあるが、最近はそれが頻繁だつた。しかし行き先を言つてから出かけるだなんて中々珍しいと三人とも考えていた。

「どおー・ランボさーん、到着!!」

「うおつ?!」

背後からランボの声が聞こえた瞬間に頭へ変な重さがかかつた。

クルクルクル、スチャツ!

なんとなくそんな擬音が聞こえたような気がした。

「おお、お見事だねランボ。」

「ランボエ・・・・・」

重さで下がった頭を上げるとYの字で満足そうに向かい合わせの椅子へ立っているランボがいた。フウ太はいつも通りの微笑みのまま拍手をしていたが、

「ランボ! 話終わってない!!」

「ブツ?!」

イーピンがフウ太の頭を蹴つてフウ太と向かい合わせの席へと着地した。

「・・・お見事!!」

＼10＼＼10＼＼10＼＼10／
パーフェクトだ、イーピン。

「ツナ兄エ・・・・」

「うん・・・・ああ・・・・そうか、9時発の飛行機で今そつちに向かつてる。では、例の
場所で待ち合わせだ。」

黒いボルサリーノを被つた黒服の赤ん坊リボーンは電話していた携帯を閉じて白い
少女の方へと心配の眼差しを送つた。

「大丈夫か、ユニ?」

「い、いいえ・・・・リボーンおじさま・・・・私、怖いです・・・・」

「・・・心配するなユニ、俺達がついてる。」

ボンゴレファミリー専用のジエット機の中で赤ん坊たちと少女が真剣な顔をしながら席に座り、目的地につくのを待っていた。

「それで、なんでリボーンは俺達まで呼び出したんだ? コラツ」

金髪でスナイパーライフルを担ぎながら窓辺で警戒をしている赤ん坊、コロネロがリボーンに語りかける。

「コロネロの言うとおりだ。俺はまだ研究で忙しいんだ・・・なるべく早く帰してくれ。」

「私もわざわざ有給も取れずに来てやつたんだ。それほどの緊急事態でも無ければ金だけをむしり取つていくよ。」

不満げに皺を寄せて文句を言う緑の赤ん坊ヴエルデに、守銭奴なフードを深く被る赤

ん坊マーモンは不機嫌だつた。

「・・・今日は、トウリニセツテ7／3のことだ。」

「「「「ツ?!?!

その言葉にリボーンとユニを除いた赤ん坊全員が驚愕した。

「せ、先輩・・・それは本当ツスか!?

と、先に事実確認をしたのはヘルメットにライダースーツの赤ん坊スカルだ。

「ああ、ユニの予知夢だ。」

「でも、あの皆と見た7／3とは違う?どうゆう事ですか?」

「私達の見た7／3とは違う?どうゆう事ですか?」

そう優しく問いかけるのは赤いカンフー服を着た赤ん坊である風だ。

「私が見た7／3は・・・・・

生きていらないような氷河でした。」

「ツ、ちよつと待てユニ。7／3が生きていないと? あのチエツカーフエイス
がこの星を生かすための物と言つてた7／3が、か?」

「はい・・・景色は寒天、吹雪が荒れ狂い、凍土の地面、冷氣に溢れ、7／3に霜つける、
万物は氷結し、玄冬だけの空間・・・でした・・・」

「・・・7／3はアイツらの灯した炎が光つていたか?」

ヴエルデは、ユニの予知に対して動搖しながらも冷静に情報の整理をしようと質問を
続ける。

ユニがヴエルデの二つ目の問いに首を横に振った。それにマーモンやヴエルデで更に驚愕して声を上げようとしたが、ユニがすぐに補足をした。

「灯っていたのは……氷でした。シモンの炎である氷河とも雪とも違う、まるで死ぬ気の炎とは真逆の物でした。」

ユニが少しづつ声も小さく震えが強くなってきたためリボーンはユニの震える手を掴み、安心させようとする。

「と、言うことだ。皆分かつたか？」

「……事情は分かつた。だが行き先はどこだ、リボーン。」

「昨日くらい、だろう。アメリカにいたボンゴレの秘匿情報管理の諜報員が死体になつて見つかつた。その諜報員がいたのはロサンゼルス州の川沿い。つまり、」

「俺らの行き先はアメリカだ。」

標的 新2 事件は二つ起ころる part1

信頼出来る部下も殺された。

変な力を持つ人間達も晒し首になつた。

家族は今私の目の前で銃を突きつけられている。

それもこれも全てこの目の前にいる少年少女達のせいなど、未だ信じられなかつた。

「・・・もう、止めてくれないか?」

「あ』あ?何を言つてる・・・まだお前の部下を殺しただけだろう?」

私は、アメリカの大統領として数々の危険にさらされた。
それ以上に自分は悪徳も積んだ。

その罰だと言われたらそれはそれで納得したいが怒りたい。

バ
ア
ン
ツ
!!

「ガツ
?!?!」

少年の隣についていた少女が無表情のまま構えていたショットガンを放ち、腕をズタボロにした。

「ガアアアアアアアア
?!?!?!」

「汚え声を上げるな。」

髪を鷲掴みされ、顔を上へと引っ張り少年と近づく。

「お前らには俺らの掲げる十字架へと磔になつてもらうぞ?」

掴んでいた手を離し、一步引いてから右腕を掲げた。

「俺達はジプシード。」

その右腕から白く冷たい冷気が渦巻いてる。ピキピキッと水が凍るような音さえも聞こえて——いや、自分の腕が凍つてきているのだ。ズタボロになり血が大量に出る腕がピキピキッと音を立てながら凍つていつてる。

「日の当たる場所を無くし、汚い物へと手をつけるしかなかつた人間だ。」

視界が徐々に霞み、それに猛烈な眠気が自分を襲う。まるで真冬の雪山にでもいるような気分だ。

ヒヨオオオオオオ——

扉や窓の隙間から風が吸いこまれていき、少年の右腕へと集束し青白い光へと変わる。

「今こそ俺達は動く時、その身を自由への糧へ・・・この心を同志への勝利に・・・

全てを絶つ氷の誓いとして、

今ここに刻む。」

掲げていた右腕を地面へと振り下ろされた。

ドガアアアアアアアアアアアアアツ!!!!

光が途切れる寸前の視界へと戦車の如き勢いで迫ってきた。

そこで私の意識は途絶えた。

数時間前 ▽△▽△▽△▽△

「それじゃあ行つてくるね！」

「行つてくるんだもんね!!」

「行つてきまス！」

「待つてよツナ兄にランボ！僕も行くから!!」

「四人とも気を付けてね♪!!」

賑やかな朝飯が終わり制服にも着替え終わつたランボ、イーピン、フウ太と一緒に玄関を出た。

ちょうど玄関先では幼稚園バスがやつて来ており、ランボとイーピンはほれに乗り込んでいった。

「じゃあ氣を付けてなフウ太。」

「うん、ツナ兄こそ氣を付けてね。」

フウ太とも並盛小へと向かうため少し進んだ先の曲がり角で別れた。
しばらく一人で歩いていると、

「十代目!!おはようございます!!」

「獄寺くんおはよう。」

自分の友人であり右腕でもある獄寺くんがいつも通りに通学路の途中の大きな曲がり角からやって來た。

「よつ、二人ともおはようなのな！」

そして後ろから手を振りながら走つてやつて来たのは獄寺くんと同じく友人の山本だつた。

「おはよう山本。」

「よお野球バカ。」

「おう、んじや部活だからまたなあああ!!!」

挨拶を交わしてすぐに俺達を抜かしていった。若干風が後ろから吹いたような気がする。

いつものことだがなんであんなに爆走して一日マシに過ごせるのだろうか？

「あいつ、なんか今日はいつもより少し早いな。」

「うん、獄寺くん俺には分からぬよ——」

「ひやー！ 遅刻するー！！」

「ツ?!」

すると後ろから聞いたことがあるが多分聞こえたおおかしい声が聞こえてきた。

「はひつ、グッドモーニングですツナさん獄寺さん!!!」

また自分たちの後ろから走ってきたのは並盛から少し離れた緑中の生徒である三浦ハルだつた。

「ちよつ?! どうしたのハル?!」

「実はバスを乗り間違えてしまつてー!! ではまた放課後に会いましょー!!」

ハルは走りながら簡潔に事情を説明して嵐のように走つて去つていった。

山本の時よりもおそらく早い・・・あれば火事場の馬鹿力つて奴だろうか?

「たくつ、あの女は・・・」

「は、ははは・・・」

何だかんだハルのおでんばかりに二人で少し飽きられていると学校に到着していた。校門では並中の生徒達が吸収されるように入つていく。その流れに自分も乗りながら下駄箱まで向かうと、

「あ、ツナ君に獄寺くんおはよう!」

「京子ちゃんおはよう!」

愛しくも遠き存在である初恋の人、京子ちゃんが靴を履き替えて立っていた。

「あ、ねえねえ。さつき、校門の近くでなんだかハルちゃんの声が聞こえたような気がするんだけど二人とも知らない？」

「ああゝ・・・・・」

聞き覚えしか無い。

は、
はひゞゞゞゞゞゞ

幻聴だろうか、ハルが半分泣きながら走つてはひはひ言いながら走つてゐる映像が脳裏に過つた。

後々聞くと無論、獄寺くんも同じだつたようだ。

「なんでだろうね？」

「うん、ハルだからつてパワーワードしか思い付かない。」

「同感だね（だな）」

失礼だろうが、そうなのだ。

「つと、そろそろ教室に上がりましょう十代目。」

「あ、そうだね。」

獄寺くんの声かけで三人で階段を上り自分達の教室に入していく。

机について知り合いに挨拶したり机の下に教科書とかの準備をしたりしてるとチャイムがなつて担任の先生が入ってきた。

H Rの時間では特に勉強などに関する連絡事項は無さそうだが、クラスに関する連絡事項があるそうだ。

「今日から副担任の松村先生が産休に入ったから、新しい先生が来てくれました。」

そうゆうと廊下からその副担任を呼びだした。

この時俺はまたリボーンかな？つと少し身構えていたが、入ってきたのは違った。背は高く、髪は黒く肌もほんの少し焼けた感じな褐色のイケメンだった。

「今日から副担任及び英語の担当になるウイルス先生だ。」

「ウイルス・ヴァンガードです。日本語に関しては大体大丈夫なので気にせず話しかけてきて下さい。」

ニッコリスマイルも中々の物だ。

ほら、京子ちゃん以外の女子がキヤーッて小さく黄色い声を上げてるよ。

そして男子はギリギリと何かを妬んでるよ・・・

「(だけどなんだろう・・・この人、ただの先生じゃない気がする。)」

自分の中の何かがあのウイルス先生が単なる教員じゃないと確信めいてるようじている。

いつもリボーンならその判断を余裕綽々にしているが、自分じゃこれがただの勘なの

か思い違いなのかは分からない……いや、超直感に外れは無いことは今までの戦いで分かつてのことだ。

あの先生は少し警戒しておこうかな……

「それじゃあホームルームは終わりだ。日直さんお願ひね。」

「きりーつ、れーい！」

『『ありがとうございます』』

「ウイルス先生！趣味は何ですか?!」

挨拶が済んで担任が出て行くそれを皮切りにまるで得物を見つけた狼の群の如く、一部を除いた女子が一気にウイルス先生に詰め寄り質問攻めを始める。

「しゅ、趣味は読書とサイクリングかな？」

「じゃ、じゃあ好きな本は??」

「え、えっと・・・華麗なるギャツビー?」

「好きな食べ物は?!」

「ぐ、グラタンだね――」

「どんな男が趣味ですか??」

「w h a t ?!?!」

それを遠巻きで傍観するごく少数の女子と男子大半。

「うわあ、ありや凄いな・・・」

「なんか変な質問してる奴いるぞ・・・」

「ものの見事に腐つてるわね。」

山本は単純に驚き、獄寺くんと黒川さんは呆れながらツツコミを入れていた。

「ああ～もうツ!! h e l p m e !!」

ウイルス先生は周りに助けを求めるが、大半の男性から嫉妬されてるため無視される。こちらにも目線が向くが、行ける訳がない・・・申し訳なく頭を下げ、山本と獄寺くんは合掌していた。

「n o t a g a i n !!」

何か嘆いているようだが、助けにいけない僕達を許して下さい新しい先生よ・・・

そんな事もありながら時間はあつという間に過ぎて放課後になつた。
今日は珍しく部活が休みだつた山本を含めて四人で帰り道を辿つていた。

「そういえば今日はリボーンさん見かけなかつたですね十代目。」

「ああ、なんかリボーンのやつアメリカに行つてるんだつてさ。」

「アメリカ? なんでまたそんな遠くに坊主は行つてんだ?」

「さあ、それが皆知らないつて。」

「へえ、どうしたんだろリボーンくん。」

「まあ、あいつがいない時もたまにはいいかも——」

ズガアアアアアアアアアン!!!

「・・・・ちょっと今のは前言撤回。」

遠くからでも分かるような稻光と爆音が響いた。

今の光の方向は幼稚園の方向だ。

もしかしたらランボに何かあったのかも知れない。

「ごめん皆先に帰つてて!!」

「ちょ、十代目!! 今のはアホ牛の雷ですよね?俺も行きます!!」

「俺もついて行くぜツナ!!」

「わ、私も行くよ!!」

四人一緒に急いで幼稚園の方向へと向かう。

36 標的 新2 事件は二つ起こる p a r t 1

無事でいてくれ、ランボ！イーピン！

標的 新3 事件は二つ起ころる part2

「おい！タカキくんに何してるんだもんね!!」

今日も楽しく幼稚園でイーピンと共に友達の皆と遊んでいると、友達の一人であるタカキくんの泣いてる声が三人組の奥から聞こえ、虐められてるのだと思い駆けつけた。
「ゲッ?! もじやもじやが来た!」

三人組はいつも皆に嫌がらせしてくる三人組だった。オイラだって嫌がらせを受けたし、ちょっとした厄介者だ。

「もじやもじやじや無いもんね！」

「じゃあ何なんだよその髪の毛W」

三人組に怒りそうになるが、それよりも奥で泣いてるタカキなんだ。
いつも懲らしめ役のイーピンはまだ教室の中だ・・・つまり今タカキくんを助ける
のはオイラしかいない。

「そんなことより！タカキくん、大丈夫？！」

「ウワアアアアン!!僕の絵がああああ!!」

タカキくんはグシャグシャになつた絵を泣きながら抱きかかえていた。
それは昨日皆が書いた家族を書いた絵だつた。

「お前らツ・・・なんてことするんだ!!人の大切物をグシャグシャにするなんて許せない
もんね!!」

三人組へと振り返つて強く睨むが、怯みもせず逆に強気になつた。

「一々うるせえよ!!」

「ウワアツ?!」

三人組の一人が両手で強く押して地面に強く尻餅をついた。

「う、ううつ！何するんだもんね!!」

「うるせえもじやもじや!!」

「も、もじやもじや?!ランボはもじやもじやなんかじやないもんね!!」

確かに自分はアフロヘアーであるがそれをモジヤモジヤと言われるのは心底腹が立つ物だ。

「いいやモジヤモジヤじやねえか何粹がつてだよ馬鹿牛！」

調子に乗つて三人組のもう一人もオイラを馬鹿にしてくる。

「ばーかうし！ばーかうし！」

「「ばーかうし！ばーかうし！ばーかうし！」」

最後の一人が変なリズムで馬鹿牛と連呼してこちらに手拍子しながら煽つてくる。それを聞き、見て、そして泣きたくなるがこんな所で泣いたら自分は弱虫だ。

「が・ま・ん・ツ・・・・」

出そうになる涙を堪えながら、我慢と口に出して必死に怒りと悲しみに耐えながら立ち上がる。

「じゃあこれも我慢してみろよ！」

しかし調子に乗った常識を知らない子供は残酷で種火に灯油をぶちまけるが如くの行為、また押し倒したのだ。

「ぐびやつ?!?」

それに再び強く尻を地面に打ち涙が溢れた。

「う、うう・・・・ウワアアアアアアアアアアン!!!」

いつもみたいにアフロから様々な物を取り出して投げたり打つたりを始めた。

ドガアアアアン!!

ドガアアアアン!!

ドガアアアアン!!

ドガアアアアン!!

「う、うわあああ！に、逃げるぞ——グギャツ?!」

逃げようとする三人組は何時の間にか投げてた小型手榴弾の爆風に軽く当てられて

伸びていた。

しかしそんなことにも気付かず十年バズーカを乱雑に取り出してトリガー押した。

砲口が自分に向いてる事に気付かずに・・・・

ボオオオオオオオオオン!!!!

いつものようにユキコちゃんやカエデちゃんとお飯事などして遊んでいると、

ドガアアアアン!!

ドガアアアアン!!

ドガアアアアン!!

ドガアアアアン!!

揺れは無い者の謎の爆発音が聞こえた。しかし私には聞き覚えのある爆発音だつた。

「ヒツ?!」

「ツー！二人はそこで待つてテ!!」

ランボがまた何かがあつて暴れていますのだと確信して爆発音のする方へ向かう。

ボオオオオオオオン!!

教室を出た途端運動場の方から猛烈な音と煙が立ち上がった。

ランボは目の前で10年バズーカを撃つてしまつたんだとそこでも確信た。

「ランボ!?どうしたノ——」

様子を窺おうと煙の柱へと近づいた瞬間、

ズガアアアアアアアアアン!!!

「ワツ
?!?！」

目の前で巨大な稻光が起きた。稻光の起こす風圧で煙は消し飛び、光に包まれた影が姿を現れた。

「電 撃 角 ————— はあつ
エレクトリコ・コルナート
?!?！」

そこには美青年となつた十年後のランボが技を繰り出し当てる寸前の構えで現れていた。

「つてマズい!!」

私はその攻撃の直線上にいて、自分よりも巨大な体躯に怯み逃げることを考えず頭を守り痛みに備え目を瞑つた。が、

「ぐつおらあ!!————ぎやああああああああああ?!」

ガシャンツ!!!

「ヒツ?!・・・あ、あれ?・・・」

当たるかと思った瞬間ランボの悲鳴が背中に抜けていくのを感じ、目を開け後ろを見ると金網フェンスに穴を開けるような勢いでぶつかつたランボがいた。

「ランボ!!イーピン!!大丈夫??」

「ランボ!!イーピン!!大丈夫??」

幼稚園にきた時にはイーピンが運動場で呆然としており、幼稚園のフェンスには、「ぐ、ぐわあ・・・」

同じくらいの背丈、牛柄のシャツと便所サンダルを履いた天然パーマな見覚えのある青年が埋まつてた。

「十年後のランボ?!ってことは……あいつ十年バズーカここで使つたの?!」

イーピンの周りには小さくクレーターがあつたり、その周りに四人ほどが目を回しながら倒れていた。おそらく何かランボが泣き乱れることがあつたのだろう……しかしそれを考えるよりも先にランボ達だ。

「ちょ、大丈夫ランボ?!」

「大丈夫イーピンちゃん!!」

「あ、ちょ待つて下さい十代目!」

「にしてもこりやあすげえ穴ぼこだな……」

京子ちゃんと山本がイーピンの所へ、それに続くように俺と山本と獄寺くんは埋まつてるランボの所に向かった。

「おい、大丈夫かアホ牛？」

「う、うあ・・・・ツ!!ここは?!」

痛みが引いたのか朦朧としていたランボが突然立ち上がり周りを見渡した。

「若きボンゴレ?・・・ってことは――――若きボンゴレ!いや、ツナ兄さん!!早く俺を十年後に帰してくれ!!」

突然、ランボは俺の両肩を持つて軽く揺さぶってきた。俺のことも若きボンゴレじやなく兄さんと言つて急かしてくる。その表情は慌てた物でいつものような気怠さは無く危機に瀕してゐる顔だった。

「落ち着けランボ!! 一体何があつたんだ?」

「こうしちゃいられないんですよ!! 十年前と入れ替わったのなら余計にヤバい!!」

「ちょ、ちょっとストップして――」

勢いは暴れ牛の如く、まるで周りが見えて無さそうだった。

「いい加減落ち着けこのアホ牛!!」

「んがつ?!?」

獄寺くんがランボの後ろからヘッドロックをかけて俺は両肩の手の拘束が外れた。

「もうよせよ獄寺、どうだランボ。落ち着いたか?」

「つたく、世話が焼けるぜ・・・」

山本が獄寺くんのヘッドロックを止めて調子を窺うと、ランボは幾分か落ち着きを取り戻していた。

「な、なんとか・・・二人ともありがとうございました・・・」

「ランボ・・・一体何が合ったの?」

「・・・未来で、氷使い達が・・・あの白蘭の時よりも更にヤバいのが動き始めました。」

「「「ツ?!?！」

俺と獄寺と山本の三人に戦慄が走る。未来であらゆる暴虐をしてきた『あの時の白蘭の時よりもヤバい。』

白蘭が負けたことで平和になつた未来にまだそんな物があるのかと疑問に思う。

「あいつらが出てきたの三年前——と、ここでは7年後ですね。突然アメリカの小さなテレビ局を占拠したのがテロが始まりでした。あいつらは白蘭の席を埋めるかのように突然、

「アメリカを堕としたんです。」

「あ、アメリカを?!?」

「まじかよ・・・・」

アメリカなんて物量と技術で勝ってきた国だ。そんな普通のテロ組織に簡単に堕とせる物なのか？

「ちょっと待て、普通のテロリストがアメリカを堕としたのか？」

山本が説明に待ったをかけ、自分達が思っていたことを問い合わせた。

「いや、アイツらはただのテロリストじゃありません……あいつらは、絶つ氣の氷を使
う

ギャングです。

標的
新4
事件は二つ起ころる part3

「さて、行き先も分かつた所で今回の目的を語つてやるよ。」

リボーンは席を立ち、アルコバレーノ全員を見渡せる位置に移る。

「さつき言つたとおり、俺達はアメリカに行く。理由としては情報漏洩の疑いがあること、そしてユニーの見た夢との関係性が確認された事だ。それを踏まえ――」

「ちよつと待つた。」

リボーンの説明の羅列に対してマーモンはすかさず異議を申し立てた。

「やられたのは君達の諜報員だろ？いくら機密情報の漏洩とは言えなんで7／3が関係してくる？」

「それについてはこいつが示す。」

リボーンは内側の胸元から、見覚えのない指輪と地図位の大きさの紙を取り出した。

「これはボンゴレの諜報員が最後に送ったメモの写真と奪取した物だ。」

皆が最初に注目したのはまず指輪だ。その指輪はよく見ると何となくある物に似てると気付いた。

「この指輪はボンゴレリングか…？」いや、それにしても形が違う。」

指輪はマーレリングのような羽の造形も無く、ボンゴレリングのような盾の造形も無く、まるで自然界にある石のような形だった。宝石を埋め込まっていることから何か死炎を使う道具のように感じるが、何かが違う気がする。そんな中、

「お、おい待てリボーン……これは本当か？」

ヴエルデが突然驚くような声でリボーンに問いかけるのを見て他のアルコバレーノが指輪からヴエルデの持つ紙を覗くと、皆が驚くこととなつた。

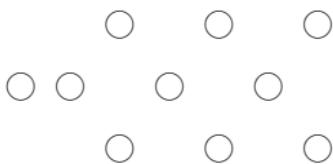
「indietro・7／3、死ぬ気と対なす絶望の力……」

「絶つ氣の冰……だと？」

「冰……ですか……」

ヴエルデの読み上げたその単語と情報に一同はある程度のことを察した。

更に情報を知ろうとヴエルデは無理矢理自分を落ち着かせ、他の情報を探つていると紙には英語の文字列とその下に何かを意味する陣が簡易的に書かれているのに気付いた。



「これは・・・セフイロト?」

マーモンが横からその陣を見て呟いたその答えに皆がマーモンに注目する。

「マーモン、セフイロトってなんなんだよ? コラ!」

「セフイロトってのは簡単に言えばギリシャ神話に出てくる伝説上の生命の樹だよ。」

「しかしそうと待てマーモン。セフィロトのセフィラは十個、明らかに死ぬ気の炎の七属性に合つてないぞ。これは本当になんだ?」

「だが、この形で書かれてあるんです。きっと何かがありますね……絶つ氣の氷は死ぬ気の炎と同じで違う何か、なんでしょうか?」

「お、おいお前ら一体何話してんだよ——」

と、スカルは頭良さそう——てか絶対良い組からの置いてけぼりがむず痒く話の内容の解説を求めようと討論の輪に入ろうとするが、

「お前はそこで見とけ。」ジャキツ

「は、はい!!」

スカル、入る余地あらず。

因みにコロネロはそれを傍観しているだけだった。コロネロ自身何となく分かるが

分からぬ、の状態なので賢い判断もある。

ヴエルデを筆頭にマーモンや風がああでもないこうでもないを繰り返す。そんな中、ユニが思い出したかのように声を出した。

「皆さんその紙の裏を見てください。そこに絶つ氣の氷への歴史と解説がありますので恐らく何かヒントがあるはずです」

その言葉にヴエルデは紙を反転させた。それをリボーン、ユニを除いた周りも覗き込む。

『死ぬ気の氷が発見されたのはまだ白人からの支配が無かつたアメリカ本土、時は1346年。

発見当時は石碑には7／3の存在意義から理由、死ぬ気の氷の運用法法等が全部書かれており、それを圧倒的戦力として捉えた村の原住民が秘匿してた。

そして、1534年にアメリカ本土への侵略戦争が始まつた。その時フランスの軍などが用いた力は死ぬ気の炎だった。

一方的な虐殺と圧倒的回復力で押し切るかと思われた戦争ではあるが、原住民は死ぬ

氣の氷でそれに対応。

死ぬ氣の氷を初めて見た炎使いの兵士達は驚嘆し氷によつて次々と倒されていった。
その時、互いは知つた――――――』

「絶つ氣の氷つてのはオイラ達の死ぬ氣の炎とは真反対の性質と力を持つんです・・・」

ランボから言われる新たなる力と、敵の存在。それに関して俺は今物凄く、この後に戦いがあるなど確信していた。ここまでがテンプレートつて奴だろうか?

「おいおいちよつと待てよアホ牛・・・そんな死ぬ氣の炎みたいな

力俺は聞いたことねえぞ?」

「そりやそうですよ。時代も違えば死ぬ氣の炎みたいにイタリア周辺のマフィアが独占した力じや無くて、ネイティブアメリカンの原住民が持つてた力ですから。」

「ネイティブアメリカンの原住民・・・あ、あれ? それだと今のアメリカ合衆国なんて出来てないんじやないの・・・そんな力で闘えるんだつたら。」

死ぬ気の炎と真反対の性質、つまり根本的な構造は一緒なのだろう。だとしたら何故、原住民は負けてしまった？

「私も詳しくは知りませんが、リボーンの言うことには侵攻するフランス軍は死ぬ気の炎を戦力にしてたそうです。お互い驚きながら戦うことでの膠着や半々な勝敗が長続きさせたことだそうです。しかし結果は無論、フランス側の物量の差です。」

なるほど、それなら確かに納得はいく。確かアメリカでの戦いは長い物だつたとどこかで聞いたことがある。人員や物の「量」の多さで「質」を押し切つたんだ。

「ところで皆さんは7／3と同じ物、について何か人伝でもいいんで聞いたことないですか？」

「僕はそんなの知らないよ。獄寺くんは？」

「いや、俺もです十代目。」

この中で一足先にマフィアで生きていた獄寺くんも知らないとなると知っているのはリボーン辺りのアルコバレーノだろう。

「俺も知らねえな・・・もし聞いてるなら多分チエツカーフエイスやバミューダとかがある時とかに語つてたはずじやねえのか?」

「あ、確かに・・・」

山本が言うことには同感だ。

もし7／3と同じような物を持つてきた、もしくは持ち込まれたのならあの虹の代理戦争の時に少しでも語つていたはずだ。

「つと、そろそろ五分は経つんじやねえか?」

獄寺くんが腕時計を見て時間を教えるとランボは來ていたジャケットを少し直し気合を入れるような仕草を始めた。

「多分もうすぐですね・・・若きボンゴレも獄寺氏も山本氏も7／3と同じ物には気を付けて。ではオイラはこれにて失礼しようと――

ランボが軽く挨拶を済ませようとした瞬間、

ボオオオオオオオオオオン!!!

爆発と煙が起る。

しかし、

「・・・あれ?」

「へ?・・・」

「は？・・・」

「え？」

「・・・・・はあああ?!?!

大人ランボが戸惑いの絶叫を上げる。

爆発と煙が出てきたのに、大人ランボはまだ僕達の視界の中にいた・・・

p r r r r r r r r r r !!

しかしそのことに驚いてる暇も無く、俺のポケットから携帯の振動と音が鳴り響いた。

「こ、こんな時に一体だれが――ディーノさん?!」

まさかのディーノさんからの電話に急いで携帯を開きコールボタンを押した。

「も、もしもし『ディーノさー』

『ツナ!!リボーンは今そこにいるか?!』

『ディ、ディーノさん?!えっと、リボーンならアメリカに行つてるつて・・・・

『何だつてえ?!』

物凄い焦りようだ・・・何かあつたのだろうか?

「あ、あの・・・何かあつたのですか?」

『ああ、実はな・・・アルコバレーノが全員行方不明なんだ!!

それにアメリカ行きの飛行機が昼に海上で爆発したつてニュースもあるから調べて

みたら案の定アルコバレーの全員を乗せたボンゴレのプライベートジェットがやられていた!!

リボーン達が危ない!!

「え？ ええええええええええ？」

ああ、もし神さまがいるのならこの願いを聞いていて欲しい。

あの羽の無い天使達の肩にいつも乗る死神を降ろしてくれ・・・・と。

一方その頃、イーピンと京子は・・・

「大丈夫ですかー?!」

「あ、先生ダ！」

「よかつた・・・あ、でもランボくんは?!」

「えつと・・・」

京子は言い方に迷っていた。

だつて奥にいるのは未来のランボくんなんだもの・・・今の面影が見当たらぬいよう
なイケメンだ。

「ちよつと何処かに飛んでつた・・・と思ひます・・・」

「飛んでつた?
?!?!

しばし、誤魔化すのに手間取つたのは言うまでも無い・・・

標的 新5 事件は二つ所か三つ目発覚

「ディーノさん!!」

「済まないな急に全員呼びだして！」

ディーノさんからの電話を受けて、ボンゴレ十代目守護者全員が俺の家に招集された。骸の代わりにクロームが来ているが、意外にも雲雀さんが来ることに少し驚いてる。

「基本的に小動物の身に起てる事には大抵咬み応えのあるのがついてくるからね。別に目の前で必要以上に群れなければ僕だって集まる事くらいはするさ。」

「心読まれてる・・・」

雲雀さんがなんだかりボーンみたいな読心術まで使つてきた。戦闘のために嫌いな事まで出来る雲雀さんマジジャンキー。でも性格は少しマシになつた？：気がする。

「雲雀はいつもどうりだな・・・所でさつきから気になつてたんだが、ランボお前どうして十年後のまんまなんだ？もう五分以上は既に経つてるぞ？」

「じ、実は――――」

デイーノさんにランボから聞かされた一部始終を説明した。

氷使い、アメリカの陥落、7／3に似た物への警戒、この三つを簡略的に説明して
る途中――――――

ズガンツ!!!

窓辺が爆発したかのように吹き飛んだ。

「うわああつ?!うちの窓がああ!!てか壁がああああ!!!」

窓どころか壁も吹き飛び、その巨大な穴の奥からは、見たことある緑色の雷光がこちらに牙を向けるように唸りバチバチと迸っている。

「てめえら、姫はどこだ？」

奥から出てきたのは金髪に高身長のジェントルマンの装いなジツリヨネロファミリーのγだつた。

「が、γ!!」

「俺達もいるぞ・・・」

「野猿?! 太猿まで!!」

なんとジツリヨネロファミリーの幹部的な三人が揃いも揃つて武装状態でウチに力チコミをしにきた。

「おいおいお前達一体どうしたんだ?!」

デイーノさん、獄寺くんが反射的に武器とダイナマイトを構えたのを見て急いで山本が仲介に入った。それに続いて俺も山本に加勢した。

「お、落ち着いてよγ!!」

「落ち着け？てめえの家庭教師が直接、それも勝手に連れ出しといで行方不明だぞ？コケにしてんのか？・・・」

「え、リボーンが?!?そのことを詳しく教えてくれγ!!」

リボーンが朝にウチからアメリカに行つた、それもアルコバレーノを引き連れて。旅行とかにしてはとても不自然だしそういうことなら必ず旅行だつて告げるはずだ。

「教える？こつちが教えて貰いたいね・・・」

未来の時よりも険悪な状況に雲雀さんと獄寺くんが動こうとする直前に声が響いた。

「そのへんで止めておきたまえ。ジツリヨネ口のファミリー、そしてボンゴレの守護者達よ。」

膠着状態の隙をつくように、もう一人の人物が何も無い空間から現れた。

「なっ?!てめえは!!」

「チエツカーフエイス?!どうしてここに来たの?!」

鉄の仮面を被ったクイズ番組の司会者みたいな男、川平のオジサンことチエツカーフエイスもウチにやつて來た。

「実はアルコバレーノの失踪について少々厄介なことが分かつたんだ。」

「少々厄介なこと？・・・なんだそれは!!」

京子ちゃんのお兄さんが問いかけると、チエツカーフエイスは懐からある物を取り出した。

「その前に、誰かこのベルトについて知っているかものはいなか??」

そう言つて手に持つた物が見せられる。鉄で出来たガワは羽のような造形が彫られ、中心にはほのかに耀く青白い水晶、そしてそれに?がれた文字が書かれた革の紐。普通のベルトにしか感じなかつた。

「なんだ？極限ただのベルトではないのか？」

皆は普通のベルトとバツクルだと思うが、俺は違つた。この異様な力に干渉されるような感覚とボンゴレリングに火を灯した時のような感触をベルトから感じて、ここに無い物、あり得ない物を思い浮かべた。

「7／＼・・・3?いや、これつてもしかしてランボの言つてた――――

「チエツカーフエイス!!これはどこで手に入れた?!?」

さつきまで静かにいたランボが噛み付くようにチエツカーフエイスに近づき掌のベルトについて問い合わせた。

「なんでこれがこの時代にあるんだ?!これはまだ7年後のはずだろ?!」

「・・・ランボくん、君はこれに見覚えがあるのだね。」

「あるんだもんね!でも先に教える!これを何処で手に入れたチエツカーフエイス!!」

口調も落ち着いたのから子供の時のような口調に戻りながらも剣幕に問い合わせる。

「これはアメリカのネイティブ達の住んでいた跡が残る奥地で見つけた物だ。跡地にはこれしか無く何か妙に感じたので拝借した。」

「ら、ランボ……一体どうしたの？それにこのベルトについて何か知ってるの？」

恐る恐る聞いてみると、ランボは少し落ち着きを取り戻しながら……ゆっくりと口を開いた。

「「「「ツ
!!!」」」

「このベルトは……オイラがこの時代に来る直前まで戦つてた、氷使いの武器ですよ……」

その発言に俺の直感は確信に変わった。これはまた大きな波、事件が起ると……

「ああ、多分だけどな……」

アルコバレーノ一同はプライベートジェットから、ハイテク技術の塊であるヴエルデの潜水艦の中で一息ついて安堵していた。

「にしてもパイロットに扮したスペイによく前々から気付いてたな。コラ」

「後方ならわかるけどまさか四方からも爆撃してくるとはね……おかげでロープに焦げがついたよ。この不快な気分はSランク報酬の十倍は出して貰わないと……」

アルコバレーノは皆少し煤がついてたり服装が細かく破けていたりしていた。

「あのパイロットのイタリア語にはほんの僅かな訛があつた。だから少しだけ戸籍を少し洗つてみたらどうも不可解な点が多すぎたのでな、スペイだつて確証した。それで海の真上だ、挟まれての攻撃を考慮してジェットの真下にエレットウリコ・マリンを忍ばせておいてよかつた。」

先程まで乗っていたジェットは何者かによる攻撃で爆撃されてしまった。しかしそ

の攻撃に相当早くに勘づいていたヴエルデとリボーンがそれに向けての準備をしていた。二人は考えや方針が根本から合わずともやることは一緒だった。なのでリボーンは裏切り者の存在の通達とマリンへの避難誘導、ヴエルデは避難用の特注潜水艦の操作で一同の難を逃れさせた。

「さて、ここからが正念場だ。アメリカに着いたらまず俺らは三チームに分かれることにしたい。」

「それはどんなチームですかリボーン？」

「まずはマーモントスカルが偵察チーム、俺と風が攻守チーム、ヴエルデとユニとコロネロが支援チームだ。目的はさつきジエットで伝えた通りだ。」

「なるほど・・・そのメンバーなら攻守と潜入のバランス的にも効率的ですね。」

アルコバレーノ全員はとある目的の下、リボーンの提案に賛成していた。しかし一同、あることを気にしていた。

「そういえばコロネロ、何故今日は事が事なのに何故戦いのエキスパートでもあつたラル・ミルチがないのですか？」

半アルコバーノとでも呼称しよう、代理戦争終了時に一人だけ大人の姿に戻つた海軍士官でありコロネロの女房でもあるラル・ミルチが何故かこの場にもジエットの際にも居なかつた。

「ッ!!そ、それはだな／＼＼＼＼＼＼＼＼

コロネロは何処か苦くも照れた顔でもぞもぞしている。なんでだ?とリボーン以外首を傾げるのを見て、その理由を知つてゐるリボーンは悪魔的な微笑みを一瞬浮かべた。

「何でだろうな、コロネロ? そういえばこの前にラル・ミルチの様子を少し見に行つたんだが、どうもその時は風邪っぽい症状と一緒に吐き気で気分を悪そうにして布団にずっと寝てたな」

「なつ?!てめつリボーンコラツ!!」

リボーンはわざとなのか事細かにラル・ミルチの状態を大きな声で喋る。コロネロはそれに慌てる。そしてリボーンの大声で言つたその意図に、

「?・・・・・ツ!!まさかコロネロ!!」

「あつ・・・・・」

ヴエルデとユニはリボーンの説明とコロネロの態度で直感的に答えに辿り着きコロネロの方向を見る。その目線にコロネロは更に顔を赤くしてバンダナで顔を隠した。

「リボーン、コロネロも何処か苦そうな顔をしてますしラル・ミルチは何処か重い病気でもしてるのでしようか?・・・」

風はまだ気付いてない。

いや寧ろ正解でもあつたりするのだが。

「違えよ風、強いて言うならあ・・・『当たつた』つて奴だ。」

「「「当たつた？・・・・・ツ?!」」

風とマーモンとスカルもが？を浮かべるがすぐに辿り着いた。

「ま、まさか・・・」

「二、コロネロ貴方・・・」

「ラル・ミルチに、
に

「妊娠させたのか?!?！」

コロネロはその言葉にウガアアアアアアと悶え、リボーンは更に口の端を吊り上げて

してやつたりな顔をしていた。

「ちょ、ま、赤ん坊のままでシたのか?!?! マジでか?!」

スカルはまだ純情なのか赤い顔をしながら赤ん坊でも『することはしてる』つてことに驚愕していた。

「そうですよ…しかもいくら元大人とは言えそんな…それにラル・ミルチの性格はいわゆるツンデレだつたのに…よくOKして貰えましたね…」

「で、でもこれは凄く目出度いことですよね！この事が終わつたら皆さんで何か祝いの品を用意しないと！」

「もう、もうやめてくれえ////////…」

別にコロネロは誇つても自慢しても良いことだ。しかし、ラル・ミルチの妊娠話になると妊娠した時の妻の言つた言葉を思い出して悶えてしまうのだ。

妊娠検査薬を片手にベッドで上半身だけを起こし、少し照れくさそうにしている彼女

がそつとコロネロに言つた、

『責任、とつてくれるな？』

その言葉と光景が忘れられないのだ。

「いや～おめでたいなコロネロ～？」

リボーンは完全に煽つてきている。

それに対してもコロネロは上手く言い返すことも出来ずにいた。

「んで責任、とれそうか?」

いつもよりも強いニヤニヤ顔でコロネロの肩に手を置き爆弾を置いてつた。

見事に爆発。

秘密裏に動く大きな事件の最中だと言うのにどこか浮き足立っていたアルコバレー
ノ達であつた。

一同の行方不明に集まり事件の嵐に気付き戦慄するツナやディーノ達の心配と不安
をよそに案外樂しそうにしていた。